

禪戒の相承に就て

博林皓堂

前篇、禪戒の圓頓戒影響説について

一、授受超越の禪戒

達磨の一乘戒が台家に相傳して傳教大師の圓頓戒になつたと禪宗の相傳はいふ、此事を述べた文献も尠くない。而るに台家からは圓頓戒が影響して日本の禪戒は發達したと云ふ聲を聞く。此間の消息を幾分でも詳にすることが本小論文の目的である。

而し其前に禪戒とは何かと云ふに就て一言して置かねばならぬ。禪戒と一つには禪宗の戒律、禪門の戒學を意味し、二つに、禪即戒、戒即禪なることを意味する、言換れば持戒とは只管打坐であると云ふのである。而し戒を防非止惡と解釋する者には此理解は困難である。而らば禪即戒を主張する禪宗は戒を如何に解釋するか、經豪和尙（道元—詮慧—經豪）は『梵綱經抄』に於て、「戒とは森羅萬象の自道取也」と云ひ天地の大法界の如是相を以て戒と名けた。斯の如き一乘實相の大戒は周徧法界であり無始無終であつて授受を超越して居ることは勿論である。本より防非止惡の論は絶えてゐる。而らば禪とは如何。本證妙修の禪に於ては坐禪はそのまゝ毘盧舍那佛身を現じ、如實に天地

法界の妙徳を具象する妙術である。故に坐禪は最高の持戒であつて禪と戒とは不二である。道元禪師が「坐禪の時いづれの戒か持たざる、何れの功德か來らざる」（『隨聞記』）と云へるは此意味である。さて戒は其起原を原めるにたとひ無始であるにしても既に禪戒不二と云ふ以上、禪の成立を以て所謂禪門戒成立の起原とせねばならぬ。これ萬仏和尙（皇二三五八）が『禪戒鈔』に於て、菩提樹下の如來の成等正覺を以て禪戒の起原とする所以である。かくして禪戒は其源を教主釋尊に求むることになつたのである。かゝる宗乘眼を以てすれば禪戒の第一次相傳は、靈山會上に於ける拈花瞬目の一刹那に行はれたことに成り、爾來嫡々相承し來つたと云ふのであるが、それは勿論史實として取扱ふべきものではない。尙ほこゝに一言して置くべきは禪戒を或は一心戒、一乘戒、實相戒、大乘戒、菩薩戒、佛戒等々と云ふから、本稿に於ても其時々々に依つて呼名が變ることである。此點豫め斷つて置く。

二、達磨の一心戒相承

戒禪不二の一乘實相戒相傳を始めて歴史的事實としてこれを承認し、研究の對象とすることの出來るのは達磨以後である。これは宗傳以外に於ても認むる所である。傳教大師の弟子光定和尚（一四三九）の『傳述一心戒文』に、「南天竺第三王子菩提達磨、一乘之戒受_ニ優婆掘_ニ至于漢地」（中）と云ふがそれである。宗傳としては傳へて達磨の『一心戒文』（又は【心戒儀】）と稱せらるゝものに次の如く述べてある。

西天達磨和尚、恭受_ニ釋尊_ニ十八世付法_ヲ、不傳_{ニシテ}而傳_ヘ、不受_{ニシテ}而受_ケ、授_ク之_ヲ慧可和尚_ニ、……所傳戒法者、以_ニ己心戒_ヲ爲_ス眞妙戒壇_ニ（萬仏の【諫蠹】）錄_ニ據_ル

この達磨の『一心戒文』なるものは疑問の書であつてにはかに達磨の眞撰と決し難いが、こゝでは只達磨の一心戒相傳が文献に見えて居ると云ふことゝ、それが達磨以前には遡ることが出来ないと云ふ二點が明にさればよい。但し台家の相傳に依れば優婆掘から相承したとあるから、優婆掘までは遡り得るのであるが、禪宗の二十八祖相承説に従へば達磨の本師は優婆掘ではなく般若多羅であるから、吾人としては達磨は一心戒を般若多羅より相傳したものとせねばならぬ。而るに優婆掘および般若多羅には俱に戒の思想と云ふ如きものを特に見出し得ないのであるから、傍々一心戒の相傳相承に就ては先づ以て達磨以後に限定して差支へなきものと思はれる。

而らば達磨以後に於ける一心戒禪戒の相承は如何。且らく宗傳を後にし台家の相承に就て述べることにするが、由來台家に於ては傳教大師の四宗相承の一として禪宗を何人も擧げて居るが、一心戒、禪戒の相承に就ては語る處が尠い。而して一家の一乘圓頓の大戒に就いては南岳、天台より次第相承して荊溪道邃を経て最澄に至り、他の影響を受くる處なくして完成したとするのである。勿論南岳天台以來、最澄に至る各々の祖師に何れも一乘戒の思想があり諸多の著述がある以上、他家の相承を言ふ必要もなく、其を待つて圓頓戒が成立したと説く必要もないであらうけれども、禪宗の徒としては此の言傳へがどの點まで事實であるか否かを究明したい氣持にかられる。此事を明にする爲に先づ佛教大師の禪法相承から検討することにする。

三、傳教大師の禪法相承

傳教大師の禪法相承に就ては二傳若くは三傳を數へることが出来る。即ち

(一) 正傳(北宗禪)。これに就ては大師の自著『内證佛法相承血脉譜』に明記する處であつて、達磨—慧可—僧璨—道信—弘忍—大通(神秀)—普寂—道璿—行表—最澄と次第相承されて居る。而して末尾に「謹案。最澄度縁云。師主左京大安寺傳燈法師位行表_{已上度縁文}。其祖璿和上。自_二大唐_{シワツテ}持來寫傳。達磨法門。傳受在_二比叡山藏。」と記し達磨の法門を傳へたことを述べて居る。これは入唐前の相承である。

(二) 傍傳(南宗禪)。大師は入唐後、禪林寺翛然から重ねて禪法を相承してゐる。これを傍傳といふ。『血脉譜』に「又去延暦末年。向_二大唐國_{ヒテ}請益。更受_ニ達磨付法。」大唐貞元二十一年十月十三日。大唐國台州唐興縣天台山禪林寺僧翛然。傳_ニ授_ス天竺大唐二國付法血脉。並達磨付法牛頭山法門等。頂戴持來安_ニ比叡山藏。とあつて是れ亦明白であるが、たゞ問題となるのは牛頭山の法門を傳へたと云ふことである。牛頭山の法門とは勿論支那禪宗の四祖道信の門より分出せる法融の禪である。若し右の『血脉譜』の記事を正しいものとすれば、牛頭禪は支那に於て法脉斷絶する以前に最澄に依つて日本に傳へられたことになる。併乍ら翛然は牛頭系の人ではなく南宗禪すなはち六祖慧能の法系に屬するものである。試みに『景德傳燈錄』卷六を見るに、馬祖道一(六祖慧能—南嶽—馬祖)の下に三十七人の嗣を擧ぐる内、機縁の語句を掲げざる(傳記省略)二十三人の名を列する第二に王姥山翛然禪師と云ふがある。これが即ち今の翛然と同一人であるから、『血脉譜』の云ふ所を以てすれば大師の禪法相承の傍傳は、これを牛頭禪ではなく南宗禪であるとせねばならぬ。(尙ほ傍傳を南宗禪としたるものに島地大等師の『天台教學史』惠谷隆戒師の『圓頓戒概論』等があるが、たゞ牛頭禪と記して居るものが非常に多い。但し『教學史』が翛然を馬祖の弟子とせず、馬祖の弟子百丈懷海の弟子としたるは、恐らく何等の誤記であらう。又宇井博士は鷲湖大義の碑文には翛然が鷲湖の弟子となつてゐることを教へられたが、筆者は未見である。)

(三)別傳(慧思所傳) これは筆者が假に名付けたものであつて便宜の名稱に外ならぬ。所謂別傳とは達磨は禪法を南嶽の慧思に相傳し慧思はこれを天台智者大師に傳へ、展轉して最澄に至つたとする傳説を指すのである。このことを誌すものに最澄の弟子光定和尚の『傳述一心戒文』、榮西禪師(一八〇一)の『興禪護國論』、虎關和尚(一九三八)の『禪戒軌』、『濟北通衡』、泰崇の『達磨三朝傳』及び『聖德太子傳』等々があるが、『一心戒文』及び『太子傳』に於ける達磨、岳相見の記事(七代記)の如きは頗る奇怪なるものであつて到底史實とすることは出來ないが、他の諸書は二師の相見並に禪法相傳の事を事實と信じて記して居る。(道元禪師も此事を信ぜられたものと見、『用心集』に南嶽慧思者參達磨と云つてゐる)。併乍ら達磨入滅の梁武の大通二年(西紀五二八)は慧思は僅に十五歳、若し大同二年(五三五)寂とするも二十三歳であるから、年代的に見るも相見のことは疑はしい、況や『一心戒文』中の七代記の記事とは一致しない。從て此の別傳——最澄が達磨——慧思——智者……道邃と禪法を相承したとの説は信を置くに足らぬものとなる。而し今は此事を事實と傳ふる多くの文献に従ひとも角一説として掲げたのである。況や台家に於ても宗義としては一應『一心戒文』の記事を認めると云ふ以上尙更このことを省く譯にはいかぬのである。

併乍ら右三傳は、以上云ふ處だけではたゞ最澄が三度禪法を傳へたと云ふことを見た丈であつて、未だ禪法と同時に禪戒を傳へたか否かに就ては言及して居らぬ。而るに今は其事が主なる問題である。依つて重ねて右三傳が禪法並に禪戒の相傳なりや否やを検討せねばならぬ。

四、傳教大師の禪戒相承

これに就ても前同様正傳、傍傳、別傳の順序に依て叙述することにする。初めに

(一) 正傳 (北宗禪に依る禪戒相承)。光定和尚の『傳述一心戒文』に、傳戒師資相承事者。從_ニ南天竺_ニ至_ニ于日本。南天竺國王第三王子菩提達磨。一乘之戒_ヲ受_ケ優婆掘_ニ至_ニ于漢地_ニ。」(中巻)とあるが、これは光定がその師最澄の傳戒に就て述べる所であるから、信を措いて差支へなきものと思はれるが、若し然りとするならば「南天竺より日本に至る」とは、達磨の一心戒が最澄に至つたと爲すものである。而して最澄の禪法の正傳は北宗禪であるから、最澄は北宗禪相承に於て禪法と同時に禪戒を相承したことになる。

(二) 傍傳 (南宗禪に於ける禪戒相承)。最澄の禪法相承の傍傳が牛頭禪に非ずして南宗禪なることは既に述べた通りである。而してその南宗禪相承がまた禪戒を兼ねたものであることを證するものに『傳法護國論』がある。此論は台徒が虎闘の『宗門十勝論』を破したるものであるが、著者及び製作年代は明でない(日本佛教學協會年報第十年所載。藤本了泰氏の中世に於ける禪宗と諸宗との交渉參照)。筆者は三洲白龍和尚(二三四九)の『禪戒訣註解』に引かれてある文を見た丈で、未だ原本を見ないが谷大圖書館及び叡山文庫に藏されてゐることである。而してかの『護國論』には、「達磨戒法。道一禪師弟子翛然和尚、所_レ授_ニ叡山_ニ也。古本尚在。可_レ疑乎」と云ひ又、「有_ニ菩提達磨受戒法。惠能。懷讓。道一。翛然次第相付。叡山大師受_ケ之_ヲ然公。傳_ニ之_ヲ山家光定長老。師々傳受展轉_{シテル}至今」とある。是に由て見れば『一心戒文』同様に台徒自ら述べた『護國論』もまた、最澄の南宗禪相承が禪戒を兼ねたるものと爲すことを知り得る。

(三) 別傳 (慧思相傳による禪戒相承)。慧思が達磨の禪法を相傳せることは前述の如く史的價値が乏しいのである

から、従つてこれが禪戒を兼ねたるものなることを立證し得ても意義なきことの様ではあるが、多くの文献がこの事を語る所を以てすれば、ともかく最澄の禪戒相承説に何がしか力を添へることにはならう。虎闘の『禪戒軌』に曰く

南岳思大得_ニ達磨_一乘戒_二授_三天台智者_ニ因立_{テツ}圓頓戒_ヲ光定欲_レ明_ニ其紹承_ヲ故_ニ贊_ニ出達磨事_ヲ定師聞_ニ之_ヲ最澄_ニ澄聞_ニ之_ヲ唐國_ニ於_レ戲台禪雖_レ分_ニ渭涇_一祖紹_二流_ミ耳_。

また泰崇の『達磨三朝傳』も此事に言及し、『禪戒軌』よりも一層明瞭に言つてゐる。曰く

達磨東來。以_ニ一乘戒_ヲ授_ケ三祖_ニ於少林_ニ傳_ニ慧思於衡山_ニ傳授之後岐_{レテル}爲_ニ兩派_ト而播_ニ吾日本_ニ來。一則_{ハチ}台家圓頓戒_ニ二則_チ禪門菩薩戒_。

であるが、右は何れも慧思が達磨に相見したとする根本事項が確實性を缺くからして、最澄の禪法相承從つて禪戒相承の論據としては薄弱であるが、最澄が達磨の戒を傳へたとする點は前二者と同様であることに一應の注意を拂つて置くことにする。

以上、傳教大師の禪法相承三傳の内、その何れよりも禪法と共に禪戒をも併せ傳へたと云つてゐるから、其の限り大師の圓頓戒は達磨の一心戒すなはち禪戒と、自家に相傳する智者大師以來の法花一乘戒との一致融合に依つて成立したと見做し得るのではなからうか。

五、慧能の戒思想と道璿及び最澄の一乘戒思想

以上は史的著證を主としたものであるが、更にこれを戒思想に關する方面より考證することに依つて補足するこ

とが出来やうかと思はれる。まづ六祖慧能の『法寶壇經』の自性の三學の偈と最澄の虛空不動の三學のそれとを比較することにする。圓頓戒に謂ふ所の虛空不動の三學（一乘の三學、自性清淨の三學とも云ふ）とは、もと智者大師の弟子章安灌頂の『國清百錄』の中に出でる「普禮法」に基くものであるが、光定の『一心戒文』に、弘仁十三年三月十七日、一乘三學の趣を嵯峨天皇に上奏したことを記した文の中に、最澄が手づから書かれたものとして左の如き語句が載せてある。曰く

自性清淨虛空不動戒。自性清淨虛空不動定。自性清淨虛空不動慧。（中卷）

而して更に最澄は「修持_{シテ}自性清淨三學_ヲ而不レ留_ラ迂廻之途_ヲ直往_テ寶所_ヲ得_ニ於佛果_ヲ」（一心戒文中卷）と云てゐるから、これこそ最澄の戒に於ける根本思想と見て差支へない。而してこの虛空不動の三學は慧思、智者大師に起原することであるから、最澄の此思想この解釋も勿論慧思以來相傳の家珍であらうが、達磨六代の祖、南宗禪の慧能禪師にもこれと同一思想を見ることが出来る。『法寶壇經』頓漸第八（本流布）に

心地無非自性戒。 心地無亂自性定。 心地無癡自性慧

とあるがそれである。これを最澄の虛空不動の三學に比するに全く同一の一乘戒思想に立つものであつて、形式と云ひ文字と云ひ極めて相通するものがある。慧能の寂年は唐の先天二年（西記七一三）であつて最澄の寂年に先立つこと一〇九年であるが、全く師資面授による相承の如き趣きがある。最澄の虛空不動の三學が一家傳來の家珍であるにしても、南宗禪相承が證明せらるゝ以上、達磨傳來の慧能の一心戒一乘戒の思想が彼の翛然を經由して最澄に至ると言へぬであらうか。翛然の戒思想なるものは今これを見出しえないのであるから如何なるものであつたかは知る由もな

いが、右の如き推論は決して無稽のことではないと考へられる。

而るに此處に今一つ興味があることがある。最澄の北宗禪相承の師祖道璿にも此と同一の思想がある。道璿に『梵網經集註』があつたと云はれるが今は傳はらぬ、しかし其の断片が光定の『一心戒文』に引かれてゐる。それに依て道璿の虚空不動の三學に對する說を見るに

於自性清淨心中。不犯一切戒。是即虛空不動戒。又於自性清淨心中。安住不動如須彌山。是即虛空不動定。

又於自性清淨心中。通達一切法。無碍自在。是則虛空不動慧。如是等戒定慧。名盧遮那佛。(下卷)

とあるが、此の道璿の說は前の最澄の虚空不動の三學に對する說と全く同一であり、而も一層詳細であると云へる。

而して惠谷師の『圓頓戒概論』に依れば道璿の一乘戒思想は、撲揚知周を通して得たるものであり『梵網經集註』を其成果とする様である(第一編)が、吾人を以てすれば其れと同時に一面また北宗禪の相承に於て一乘戒一心戒思想を傳へたのではないかと思はれる。若しこれを事實とするならば道璿は南宗の慧能と同一なる一乘戒思想を、北宗禪に於て傳承してゐるのであつて、其を行表を経て最澄に傳へたことになる。かく考へることに依つて南宗の慧能、北宗禪相承の道璿、南北兩宗相傳の最澄の戒思想が一致することは當然であり、同時に最澄が南北兩傳ともに一心戒を相承したと推知すべき理由が見出される。

而るに此處に最も興味あることは、道璿は北宗禪の祖神秀(大通)の孫に相當するのであるが、今云ふ如くその戒思想が北宗禪の影響を受けたるものとするならば、畢竟それは神秀の戒思想が、一乘戒思想であつたと云ふことになる。果して而らば南宗の慧能と北宗の神秀とは戒に對して同一の思想を持してゐたことになる許りでなく、共に黃梅

の五祖弘忍大師よりこれを傳へたことになる。果して然らば慧能神秀の二師は彼の『六祖壇經』に記されたる如く頓漸の優劣あるものではなく、何れも自性清淨の本覺門に立脚する難兄難弟の大宗師家とせねばならぬ。神秀の法力に就ては近頃屢々宇井博士が語られる所であるが、それが一心戒相承を検討する上からも同一結論に達することは頗る興味深いことである。

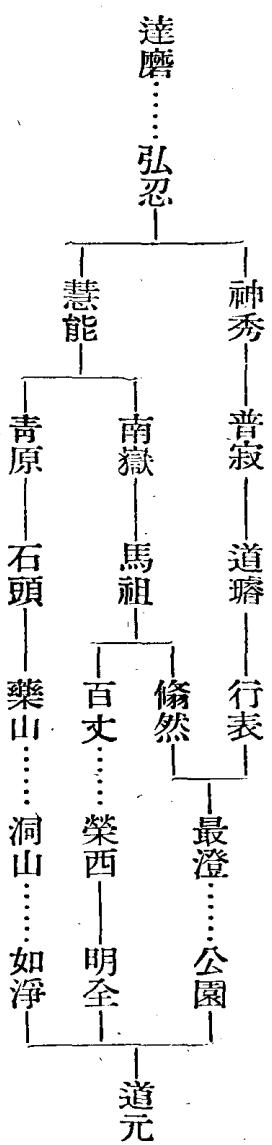
以上云ふ所に依つて傳教大師が禪門所傳の一心戒を相傳した若しくは影響を受けたることは事實に近い様に思はれる。而るに台家に於ては『一心戒文』は別として、多くは此事を言はずして大師の戒相承と云へば何れも慧思、智者、灌頂、智威、玄朗、湛然、道邃、最澄の次第相承と爲し、禪門一心戒の影響の如きさしたる問題とせぬ如くである。勿論一家の圓頓戒は正依法華傍依梵網と稱し、法華一乘の精神に依て戒を立つるのであり、慧思、智者、灌頂乃至湛然等に何れも圓戒思想があり、一乘の教義に依つて戒を解説した著作があるのであるから、禪戒の影響なくして單獨に成立したとすることが正義であり、禪戒の影響の如きあるとするも極めて微々たるものである、故に其は禪法相承として四宗相承の一に數へる程度を以て妥當とすると云ふのではあらうけれども、以上述ぶる所に依つて禪門戒の最澄への影響は、單に禪法相承として片付ける以上のものではないかと思はれる。

後篇、圓頓戒の禪戒影響説について

六、禪戒の宗門相承

而るに圓頓戒の研究に造詣深い福田堯穎師に依れば、傳教大師の圓頓戒は各宗に影響し、日本各宗の一乘戒はこれ

を母體として發達したとせられ、禪戒に就ても同様のことを述べられてゐる（大正學報二十四・五號一六頁）。但し該論文は簡略であつて詳細を知り得ないが禪宗と云ふ以上、主として榮西道元兩禪師の臨濟曹洞二宗を指すものと思はれるが、且らく問題を道元禪師に限定して考察するに、禪師の禪戒相承は天童如淨禪師の相傳であつて、圓頓戒の影響と思はるゝ點は全くない。たゞ台家の影響ありとすれば禪師の戒相承は



であつて、初め叡山に受戒した事と、天台出身の明全から榮西の戒を受けて居ると云ふ二點であるが、第一回の公園僧正からの相承は十三歳の少年として受戒したと云ふ丈のものであり、明全よりの受戒も『隨聞記』等を通して見るに、何ら一乘戒思想を傳承したと見得べき點が見當らぬ。又全著書の何れの文にも圓頓戒の影響を受けたと推知すべき點は見當らぬ。又禪師は初め叡山に參學したる結果、『法華經』に特に親しみを持つて居られたのであり、著述中盛んにこれを引用して居るけれども、それを以て直ちに禪師の禪戒が圓頓戒の母胎たる『法華』に依つて成立したものとも考へられぬ。従つて禪師の一乘戒三傳の内如淨禪師相傳のそれのみが、極めて重要性を持つこととなるが如淨禪師には後に云ふ如く特に戒思想と云ふべきものを見出しえない、併し乍ら道元禪師は如淨禪師の口授と禪師自身の深き道力に依つて『教授戒文』に述べられたる如き戒思想を抱懐せられたるものと思はれる。而して禪師の一心戒相承

は『佛祖正傳菩薩戒儀』に、大宋寶慶元年九月十八日夜半、妙高台に於て「菩薩戒は禪門の一大事也」として授けられたるものが其れである（建拂_{記補}）。

七、道元禪師の戒思想と其の相承

而らば如淨禪師相傳と云はるる道元禪師の戒思想は如何と云ふに、それは弟子懷奘（一八五八）一九四〇編輯の『教授戒文』に明かである。まづ三聚と十重に就てみると三聚戒は

攝律儀戒 諸佛法律所_ニ窟宅_一也。諸佛法律所_ニ根源_一也。

攝善法戒 三藐三菩提法。能行所行之道_{ナリ}也。

攝衆生戒 超_レ凡_レ越_レ聖_レ度_レ自度_レ他也。

である。十重禁戒は（二三を擧ぐれば）

不殺生戒 生命不殺。佛種增長。可_レ續_ニ佛慧命。莫_レ殺_ニ生命_ヲ。

不偷盜戒 心境如々_{ニシテ}。解脫門開_ク也。

不婬欲戒 三輪清淨_{ニシテシ}。無_レ所_ニ希望_一。諸佛同道_{ナル}者也。

である。この攝律儀戒は天地法界は總じて戒の窟宅根源であると云ふのであり、不殺生とは生滅なき佛の生命を保護任持すると云ふのである。斯如き解釋は道元禪師獨特のものであつて他に類例を見ないが思想としては一乘思想である。而し禪師の戒の特色とする所はこれを只管打坐に於て捉えるにある。即ち只管打坐に三歸、三聚、十重諸戒を如

實に而も同時に具足するものであり、七六條戒を發展せしむる根源でもある」とする點に存する。これは本證妙修の坐禪にのみ許されたる特權である。若し此特色がなければ禪戒と云ふも畢竟圓頓戒と何等異なる所はない。然し乍ら禪師の此の禪門一乘菩薩戒は如何にして相傳せられて來たか。これを達磨に溯つて考察して見る必要がある。若し達磨の戒思想と道元禪師のそれとを批較することに依つて、そこに血脉貫通を見出し得るならば禪師の戒は達磨以來嫡々面授であつて他家の相承影響を受けぬことゝなる、此意味に於て兩者の戒思想の批較は重要性を有する。

ア、達磨の一乘戒思想。これは『一心戒文』と稱せらるゝものに述べられてゐる。但し此一心戒文なるものは『禪戒本儀』『諫蠹錄』等の萬仏和尚の著述とこれを繼承するもののみに見る所であつて、其他の禪戒書には其名すらも見出しえない。勿論原本は何れにも存しない。こゝに於てか疑問の書とせられるのであるが、且らく萬仏和尚に従つてこれを達磨の親撰として扱ふことにする。これに依れば戒に就いて左の如く云つてゐる。即ち

所傳戒法者。以_ニ己心戒_ヲ爲_ニ真妙戒壇_ト

と。これは道元禪師が攝律儀戒に於て諸佛法律所_ニ窟宅_也、諸佛法律之所_ニ根源_也と云へると全く同一であつて、自己自身乃至法界全體を以て戒の根源とするものである。又『一心戒文』に依れば不殺生を

自性靈妙。於_ニ常住法中_ニ不_レ生_ニ斷滅_ヲ見_ナ。名爲_ニ不殺生戒_ト

とあるが、これも道元禪師の不殺生戒——生命不殺。佛性增長。可_レ續_ニ佛慧命。莫_レ殺_ニ生命_也と全く同一思想である。

然し乍ら前述の如く『一心戒文』が疑問の書であるならば、道元禪師の戒思想と一致するとしても、達磨の戒思想が一乘思想であることの證とはならぬ。而も其は達磨の思想を傳へて居ると考へられる點が多々ある。例へば四行觀の

理人に「深信_ニ舍生同一眞性」_ヲとあるは『一心戒文』の「自性靈妙。於_ニ一如法中_ニ不_レ起_ニ生佛_ヲ一見_ヲ。名爲_ニ不謗三寶戒_ヲ」と全く同じく、又「凝_ニ住_シ壁觀_ヲ無_レ自無_レ他。凡聖等_ニ堅住_ヲ不_レ移_ヲ」とあるは『一心戒文』の「自性靈妙。於_ニ平等法中_ニ不_レ說_ニ自他_ヲ。名爲_ニ不自讚毀他戒_ヲ」と同一の思想である。従つて四行觀が達磨の思想ならば『一心戒文』の思想も達磨のそれと言へることになる。而し今は是れ以上此の考證を續けることを保留する。

イ、慧能の一乘戒思想。次に六祖慧能に就て戒思想を見る、それは『壇經』に説かるゝ心地無相の戒と稱せらるゝものであつて、頓漸第八の章に「心地無_レ非自性戒」とあるがそれである。これは一乘實相戒を手近く個人心の自性清淨なる點に求めたるものであつて、達磨の『一心戒文』の所傳戒法者、以_ニ己心戒_ヲ爲_ニ眞妙戒壇_ヲと全く同一戒思想であると云ふべきである。此意味に於て慧能の心地無相の戒は達磨相承の其れであると云ふべきである。而らばこの慧能の自性戒はその後如何に相傳せられたか、次にこれを藥山に就てみる。

ウ、藥山の一乘戒思想。藥山の一乘戒思想は高沙彌を接するの語に見られる。『景德傳燈錄』に

高沙彌藥山住菴。初參_ニ藥山。藥山問_ニ師。什麼處來。師曰南嶽來。山云何處去。師曰江陵受戒去。山云受戒圖_ヲ什麼_ヲ。師曰圖_ヲ免_ニ生死_ヲ。山云有_ニ一人不_ニ受戒_ニ亦免_ニ生死_ヲ。汝還知否。師曰恁麼_ヲ卽佛戒何用。山云猶掛_ニ唇齒_ヲ在。便召_ニ維那_ヲ云。這跛脚沙彌。不_レ任_ニ僧務_ヲ。安排_{シテ}向_ニ後菴_ヲ著。又云師乃辭_ニ藥山_ヲ住菴_ヲ。山云生死事大。何不_ニ受戒_ヲ去。師曰知_ニ是這般事_ヲ。喚_ニ什麼_ヲ作_レ戒。藥山咄。這餽舌沙彌。入_ニ來近處_ニ住菴_ヲ。時復要_ニ相見_ヲ。（卷十）

これは實相戒は授受を超越することを商量せるものであつて、藥山の戒思想が達磨乃至慧能のそれと血脉貫通する_ヲとを證するものである。更に藥山には僧問_ニ藥山。如何_{ルカ}是戒定慧。山曰我家無_ニ如_キ是閑家具_ヲの商量もあるが、これ

もまた前の商量と同一思想を逆説的に述べたものである。此の藥山の戒思想は雲巖を経て洞山に至つて居る。而らば洞山に如何なる戒思想があるか。

工、洞山の一乘戒思想。『洞山錄』に「擬レ心即破戒、擬レ味即破齋」と云ひ、「三羯磨中、早成_シ破戒一了」と云うてあるが、これは藥山の「我家かくの如きの閑家具なし」と云へると同一轍であつて、その禪僧的表現は痛快と云ふべきである。而しこゝに血脉貫通を見ることが出来るのであつて、洞山の戒思想は達磨以來一貫の一心戒に外ならぬ。

オ、如淨の一乘戒思想。達磨の一心戒は上述の如く慧能、藥山、洞山等嫡々相承する所であつて遂に天童如淨に至つたのであり、道元禪師の戒思想は其相傳影響であるから、其意味に於て如淨の戒思想は今の場合極めて重要であるが、『如淨錄』及び『續如淨錄』ともに此を見出すことが出来ない。僅に南山を頌する偈の中に

歴劫戒光秋月明。_{ナリ}南山靜照烟霜月。云々

と云ふ一首がある丈である。即ち歴劫の戒光と云ふ所に三世常住の實相戒思想が見えてゐると思はれるがこれ以外何物をも見出すことが出来ぬ。而るに如淨禪師は常に只管打坐を強調して「不_レ須_ニ燒香禮拜念佛修_レ餓、看經」と云つて居られるが、こゝに修餓をもちひすと云ふ以上彼の藥山と同一の意味に於ける「受戒をもちひす」の意味が含まれてゐると考へられる。故に「燒香禮拜念佛修_レ餓、受戒、看經を須ひす」と云ふが禪師の眞意とも言へるであらう。又『如淨錄』には「淨慈鉢盂。移_ニ過_{シテ}天童_ニ喫飯」と云ふがある。これは杭州の淨慈寺から天童山景德寺へ轉住したからかく云ふのであるが、淨慈に在るも又天童に移るもたゞ一貫せる禪戒不二の坐禪人としての生活以外何物もないと云ふものである以上、此語は直接戒の意義を説明するものではないが然も其れにも増して禪師の戒思想を語るものであら

う。禪師の戒思想を究明せんとするに當り、以上の外これを検討する資料の無いことは、道元禪師の戒思想が如淨相傳なることを言はんとする者に取つて遺憾ではあるが、一生たゞ只管打坐を強調し是を以て一貫したる禪師としては、身を以て實相戒を護持したる以外特に戒に關する説が無いとしても決して怪しむには足らぬ。寧ろ其れの無いことが反つて禪師の面目、禪僧の特色とも言はれやう。此意味に於て如淨禪師は一心戒實相戒をその師雪竇智鑑より面授相傳して身を以て護持し身を以て道元禪師を導いたのであるが、更に寶慶元年九月十八日夜半相傳の儀式を修して道元禪師に相傳したるものと言ふべきである。而して其の實相戒が道元禪師の絶大なる法力に依つて『教授戒文』と成つたものであるから、禪師の一心戒實相戒の思想は如淨の爐鞴以外より産れたものではない。先にも言へる如く初め叢山に出家した禪師は公園に受戒したけれども、其は勿論受戒した丈である、又後に明全に受戒し九年隨侍したけれども、明全は後年の道元禪師の深遠なる思想を產出す源泉とはなつてゐない。禪師が明全を志の高き宗教家として敬服することは非常であるが、一乘戒の思想を傳授されてはゐない。又禪師の著述中日本の高僧等を一括して批評する語は諸方に見出されるけれども、未だ一言もこれを推稱する語を聞かぬ。『學道用心集』に「前來入唐の諸師教網に滯る」と云ひ、「佛書を傳ふと雖も佛法を忘れたるが如し」と稱する一方「西來の祖道吾れ東に傳ふ」と云はるゝ禪師が、戒のみ他宗の祖師の説に依據して宗旨を宣べることは矛盾である。かく考ふる時禪師が傳教大師の圓頓戒に影響されたと見得べき點は甚だ稀薄と成つてくる。

八、結

以上前篇に於て達磨の一心戒が傳教大師に相傳したとの傳説を基礎として、その傳説がどれだけ眞に近いかを見たのであるが、右に依つてたとひ光定の『一心戒文』に依據せなくとも其の事實が證せられるかに考へられる。但し本稿はなほ未定稿であつて未解決の問題も残つてゐる。例へば達磨の『一心戒文』と稱せらるゝものが果して達磨の作であるか。それが達磨の作でないとした場合達磨の戒思想は如何なるものか、何によつて一乘戒思想なることを證し得るか、また『一心戒文』が六祖慧能以後のものとせられた場合、六祖の自性一心戒は如何にして成立したか、それを尙ほ達磨以來の相傳とする根據如何（室内相傳を別として）等である。右の諸問題の究明に依つて幾分訂正を要する箇所の生ずることが豫想せられぬでもないが、それは又後日の問題とする。次に後篇に於ては福田師の説に刺戟せられて圓頓戒の禪宗への影響と云ふことが果して道元禪師に適用せられるか否かを見たのであるが、道元禪師に於ける限り適用せぬと思はれる次第である。然し以上は筆者自身の参考であつて駁論ではない。

尙ほ諸經論中に於ける禪戒思想の先驅を調査して、その發展経過を見ることも重要なことではあるが以上を以て擱筆することとする。（昭和三・三・八）